

下々戸主堅見年五十三 兄意伎奈年廿三次丁、
正丁○中略 殘疾、

〔東大寺正倉院文書十二〕山背國愛宕郡雲下里計帳三年○神龜

戸主出雲臣吉事戸略○中

戸主出雲臣吉事年參拾肆歲略○中

母酒人連鳥木賣年陸拾貳歲 一目盲殘疾、

〔甲陽軍鑑三品第十一〕今川義元公の時、山本勘介、三河國牛久保より、今川殿へ奉公の望に參るとい

へども、彼山本勘介、散々夫男にて、其上一眼指も不叶、足はちんばなり、然れども大剛の者なれば、

義元公へめしおかる、様にと、廣原勘介が宿成る故、おとなの朝比奈兵衛の尉をもつて申上る

は、○下略

〔常山紀談二十〕重矩は伊賀守勝重の孫にて、島原に於て討死有し、内膳正の子、周防守重宗の從子

なり、瞎カタにて長卑く、以の外見ぐるしき人なりしかども、有德賢才のきこえありて、寛文二年、祿二

萬石増賜はり、大阪の御城代たり、

〔藩翰譜七伊達〕政宗○中 郎等遠藤不入齋を使者として、關白吉○秀に音信を通ず、急ぎ政宗御陣にま

わり向ふべきよし仰せ下さる、やがて家の子郎等百騎を具して、天正十八年六月、本國を打立ち、

下野の國にさしか、り、小田原に趣く道塞つて通り得ず、會津のうち大内といふ所より引返し、

越後國へ係り、日數經て小田原に至る、關白まづ底關といふ山の中に旅館點じて、政宗を入れら

る、政宗二十餘りの男の眼。片方なる。髮短く押し切て打かぶり、其貌甚だ異體なり、

〔吾妻鏡十二〕建久三年正月廿一日甲午、渡御于新造御堂地、犯士之間、運土石疋夫等之中、有左眼盲

之男、幕下覽怪之、彼者自何國誰人進哉之由被尋仰、乃景時雖相尋之、不分明、被召寄御前、佐貫四郎

大夫伺御旨、面縛之處、懷中帶一尺餘打刀、殆如寒氷、又覽其盲魚鱗覆眼上、彌知食有害心者之間、被